

新除草・調節剤

タカノック® 微粒剤
MCP・テトラピオン除草剤

(取扱メーカー) 三 共 株 式 会 社

対象：スギ・ヒノキ造林地の下刈り。

成分：MCP-Na；2-メチル-4-クロロフェノキシ酢酸ナトリウム……7%と、テトラピオン；2,2,3,3-テトラフルオールプロピオン酸ナトリウム……2%とを含有する類白色の微粒剤である。

作用特性：MCP は、広葉雑草の防除に広く利用されている植物ホルモン剤である。一方、これの相手として、イネ科植物に選択的で特異な抑制作用を示すことが知られているテトラピオンを配合したわけであるが、作用の面からは単独の成分として考えられなかった多くの利点が出てきている。

主な特長としては、多種類の雑草低木類に作用すること。イネ科植物よりも、広葉の植物に伸長抑制作用が長期間持続すること。造林木(スギ・ヒノキ)には、樹上から散布しても薬害の出ないこと、などである。農薬登録は、スギ・ヒノキ造林地の下刈という適用場所で、クズ・落葉かん木および一年生広葉雑草を対象にしている。

農耕地と違って、造林地には雑多な宿根性や一年生の雑草、常緑や落葉低木類が混生している。この中で、造林木苗木に照射する陽光量なるべく多く、長期間持続することが望ましい。しかもこれらの場所は、自然をできるだけそのままに残しておきたい地域でもある。除草剤として求められる性格が複雑で難しい場面といえ

よう。本剤は、植物の種類によって、作用の強弱差があり、数カ月から2年間にわたる伸長抑制が主なねらいである。つまり、邪魔な植物を枯らさずに、伸びるのを遅らせて実害を防ぐもので、環境保全や土砂崩壊を防止する点からも心配のない薬剤である。

毒性：急性経口毒性LD₅₀(mg/Kg)は、ラットでMCP……900, テトラピオン……11,800, 普通物扱いである。魚毒性 TL_m(ppm/48時間)は、コイ稚魚でMCP……290, テトラピオン……> 10,000という値で、A類である。

作用性：葉面吸収を期待する微粒剤で、対象とする植物の茎葉面になるべく多量に付着させ、成分を効率よく吸収させる必要がある。散布量は10a当り10~13Kgが標準で、部分的な偏りのおきないように、全面均一な散布をする。

使用時期は、対象植生の生育伸長期としているが、具体的には6~7月が下刈目的の適期である。

使用上の注意事項：時期が遅くなるほど、葉面積は拡大し、それだけ薬剤を受け止める量が増加するので、秋期の散布でも効果は安定している。その反面、繁茂がひどくなるため、散布作業は困難になる。経験的に対象植生の草丈が、散布者の肩の高さを上廻るようになると、効果が低くなる傾向がある。

また、散布時期が早すぎて、対象植生の展開葉面積がまだ少ない場合には、薬剤の吸収量不足で効果が不十分になることがある。

現地で薬剤を散布するに当たっては、基本的に葉面に多く付着させることを考慮すべきで、風で葉が動いている時には粒子が乗り難いこと、散布地の歩き方によっては葉面に乗っている粒

新除草・調節剤

子を振り落しがちなこと、散布後、短時間で降雨に洗い流されないようにすることなどに注意していただきたい。朝露のある時や、夕方風がおさまって空気の湿ってくる時は、良い結果の得られるものである。

タフラー[®]乳剤・水和剤
ブタミホス除草剤

(取扱メーカー) キング化学工業株式会社

対象作物：芝（コウライシバ・ヒメコウライシバ・ノシバ）。

成分・作用特性：0-エチル-0-(3-メチル-6-ニトロフェニル)-N-セカンダリ-ブチルホスホロチオアミデートを50%含有する乳剤と40%を含有する水和剤とがある。本剤は、主として雑草の幼芽部に接触・吸収されて作用を発揮する。本剤が植物の生長点に接触すると、生長点の細胞数の増加が抑えられる。この細胞分裂の阻害が、殺草性に結びつくと考えられる。

毒性：普通物で、魚毒性はB類である。

使用方法：登録されている使用基準は、次の通りである。

使用上の注意：①本剤は雑草発生前処理の効

タフラー乳剤・水和剤の使用基準

剤型	作物名	適用雑草名	使用時期	使用量 (ml・g/10a)	散布液量 (l/10a)	使用方法
乳剤	芝 〔コウライシバ・ヒメコウライシバ・ノシバ〕	畑地一年生雑草 〔キク科を除く〕	春期又は秋期雑草発生前	春期 ml 1,000～2,000 秋期 600～1,000	250～300	土壌全面散布
			秋期雑草発生前	1,000～1,200 g		
水和剤	芝 〔コウライシバ・ヒメコウライシバ〕					

果は大きいですが、既発生の雑草には効果が劣るので、必ず雑草発生前に芝生全面にむらなく均一に散布する。②多年生雑草およびキク科雑草には効果が劣るので、それらが優占する場所での使用はさける。また、広葉一年生雑草の優占する場所では、所定範囲内で薬量を多目にする。③本剤は葉害のおそれがあるので、ターフ形成前の芝生には使用しない。④洋芝に対しては、使用しない。⑤本剤の使用により、ときには葉先の黄化等の葉害を生ずるが、やがて回復し、その後の影響は認められない。⑥土壌が極度に乾燥している場合には、事前に散水するか、または散布液量を多目にする。⑦散布の際は、草花・植木など、周辺の植物にかからないように注意して散布する。

本誌掲載原稿の募集

本誌を愛読されている皆様より、原稿を募集しておりますので、ご寄稿下さい。内容は、除草剤・生育調節剤に関する記事であればよく、400字詰原稿用紙で20～30枚位、図・写真の挿入も可。原稿料は、当協会の規程によりお支払いいたします。